



FOA・EAST

NEWS No.10

1991. 3. 31.

“あつ”という間の
30年間

水田 吉春

「趣味は？」と聞かれ、「フットボールの審判をやっています」と自信を持って答えられ、人にもそれを勧められるようになったのは、審判を始めて8年経ってからでした。

大学を卒業すると、現在のように社会人リーグもなかった当時は、一応フットボールとも縁が切れたわけでしたが、社会人になって東北と関西を回って帰ってきた2年目の61年、当時立大の監督中沢氏の命で審判部へ入部することになったのです。母校からは安藤・神子・蔵野3氏を先輩とし、野村・青木両氏と小生の3人が加わり6人の登録となりました。この年、新加盟校を除く6校（東大を除く6大学と日大）が6人ずつの審判を出し、それまで15人くらいだったメンバーが一躍36人に増えた訳です。早速青山のマンション、鳥取氏邸での米軍審判部・アナスタシヤス氏のクリニックが頻繁に開かれ、奥様手作りの山盛りのサンドイッチとコカコーラにつられて欠かさず出席したものです。小畑さんの通訳にも大変助けられました。

中学入学と同時にフットボールに出会い、高校、大学と10年プレーヤーをしていたので、多少ルールにも自信があったつもりでしたが、審判をやるとなるとズブの素人であることにすぐ気付きました。

審判になってもルールブックを入手できなかった当時は、クリニックと言っても、まずルールクリニックが最も参考になった訳で、メカニックは二の次でした。ただ、小生は幸いにも笹田さんがクルーと一緒に組んで下さるチャンスが多く、実地で手取り足取りメカニックを教えてもらいました。「今日はアンパイアをやってごらん」「今日はレフリーだよ」と、レフリー、アンパイアをやりながらの実地指導を受け、お陰でぐんぐんと力がつくのを自分で感じる程に自信をつけることができました。3年後には甲子園ボウルの5人クルーの関東側2人の一人に選ばれるというチャン

スにも恵まれました。当時、後輩の審判への勧誘も毎年1～2人ずつ誘い込むようにしていましたが、3～5年すると結婚、転勤等々で退部するようになり、定着率の低さが悩みの種でした。日頃からそんなグチを聞かされていたのが、かつてのチームメイト深川・栢下・渡辺の3君。渡辺君に3年、深川君に8年、栢下君に至っては10年も一本釣りに要しました。

審判になって15年目の75年、当時の審判部長、桜井氏が急に地方へ転勤となり、小生にその代役が振られてきたのです。悩みました。そこで同輩の喜多・喜入両君に相談し「両君の協力が得られるなら名前だけお預かりします。御帰京になられたら又お返しいたします」ということで引き受けることになりました。早速、クリニック、部員勧誘、審判交通費の獲得と仕事は山積みでしたが、皆が協力し、手分けして良くやってくれました。小生38才でした。その頃、ゲームが終わると「今日の審判はよかった」などと声をかけてくれる方々がいて、大いに我々は励まされたものでした。今日でもそれは変わりませんね！

今から4年前の87年、FOA関東には理事会組織が誕生。理事の一人に選ばれた小生は引き続き部長職をやらせていただき、それも2期4年無事にこの役を務められたのは、喜入君をはじめそれぞれの期間理事を務められた方達が骨惜しみすることなく、その役割を果たしてくれたお陰です。

通算15年間、至らぬ小生をサポートして下さった皆様、本当にありがとうございました。今後は1年でも長く審判を続け、日本のフットボール発展のため、微力ではありますが精一杯努力を惜しまぬ所存ですので、よろしくご交誼の程お願いいたします。

昨シーズン149人の審判員を獲得した我が関東審判部。組織の益々の拡大と充実を目指し、全部員一丸となって今年新たに発足する執行部を盛り立てようではありませんか！

（みずた よしはる氏＝日本アメリカンフットボール
審判協会関東審判部長）

理事を退任するにあたって

喜入 博

今回、この3月末日で関東審判部の理事を外れる事になりました。

1965（昭和40）年、私が当時大学1年であった時に、現在の都立西高アメリカンフットボール部監督だった小野恵稔氏から「審判をやらないか」とのお誘いを受け、右も左もわからないまま当部に入部したのが、審判活動の始まりでした。そして15年前に当時関東審判部長だった桜井和夫氏が高松に転勤になり、その後任として就任された水田吉春氏の指導の下で当部を運営してきました。

この間、当部が日本のアメリカンフットボールの発展とともに、活発にまた大きな問題もなく活動できたのは、水田氏はじめ諸先輩のご指導、ご支援と同時に部員の方々のご協力の賜でした。時には、無理をお願いし、また強引に運営してきた事もあります。ここで、改めて当部部員の方々や、部としての無理なお願いに対応していただいた日本協会、学生連盟、社会人協会の関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。運営を退くに当たり、これまで私が考えていたことをこの「FOA・EAST・NEWS」に記したいと思います。

私が審判活動を始めた頃の昭和40年代は、ご存じの通り加盟大学も少なく、従って試合数も少ない時代でした。当部の部員もその試合数に見合った数であり、現日本アメリカンフットボール協会理事長の安藤信和氏の事務所、桜井氏の事務所などを借りながらのクリニックも少人数で、お互いのコミュニケーションが通いあったものでした。このように比較的家族的に運営されてきたフットボール界にも、やっと発展の兆しが見え始めてきた時代でした。

私が15年前に水田氏の下で運営に携わるようになってまず行った事は、これからのフットボール界の発展に対して、当部が対応できるように組織を確立する事でした。そのためにはまず人を集め、審判員としての定着を図ることが必要でした。この事については、各大学の監督、OB会長に審判員の推薦を依頼し、在席部員を通しては同僚、後輩を勧誘してもらいました。最近では社会人のフットボールの発展が目覚ましく、現役新卒生も卒業後続けて社会人チームでプレーすることが多くなっています。従って一般企業同様、審判

部も求人難の時代になっています。そのため、3年前からは関東学生連盟の協力を得て、現役4年生の全卒業生に対して入部案内をダイレクトメール（DM）として送ることを始めました。（もっとも、このDMは審判部の活動紹介も兼ねており、社会人としてプレーを続ける人への審判活動の啓蒙行為という側面も持っています）

審判員は入部して直ちに審判として一人前になる、という訳にはいきません。クリニックに参加し、試合の場数を踏んで徐々に成長し、はじめて立派な審判となります。この定着を図る事を最重要課題として取り組んできました。健康、現役復帰、コーチ就任、業務多忙、転勤、転居、結婚、育児（実際に育児で審判活動を断念した人もいます）などの理由でどうしても活動を続けられなくなる人が毎年出ます。これらの人はいずれ復帰していただける可能性があります、「審判がつまらない」「辛い」「面白くない」「自信がない」などの理由で審判部を辞める事がないよう、環境を整備することが重要でした。新入部員が「なんとなく集まっている団体だ」という印象を持たず、「立派な組織で運営されている」との認識を持ってもらう事が必要だと思い、年間スケジュールの確定や計画に基づいた活動を心がけてきたつもりです。

次に重要な項目として取り組んだのは教育です。審判員は「ルールに関する知識」「審判としての動き方：即ちメカニクに関する知識」そしてそれらを「適用する能力」が必要です。この中のいずれじや一つが欠けても優秀な審判にはなりません。グラウンド上のチームが1年間の活動の集大成として試合を行っている事に対し、審判員も正しい判定でそれに応えなければなりません。そのためには多くの試合を経験し、審判員として技術を向上させるだけでなく、これらの2つの知識と能力が備わる教育のシステム作りが必要と考えました。

関東審判部では現在、年間10回のクリニック（うち2回は新人に対するオリエンテーション）と1回の合宿を行っています。このクリニック、合宿ではルール、メカニクに関する重点項目の説明やケース・スタディを中心に行われますが、これらのクリニックで「何をテーマとして取り上げるか」それに対し「どんな資料を用意するか」そしてそれを説明するインストラクタが「どのように説明するか」が重要であり、これに携わった当部のインストラクタ委員の皆さんは、大変な労力と知恵を提供されたことと思います。この

結果、資料は多くのものができあがり、クリニックは都合で参加できない部員も自宅で学習できるようになりました。

初期の頃のクリニックの資料は、すべて紙によるものでした。しかし、映像機器の発展・普及により数年前から当部でもVTRを利用したクリニックが行われるようになっていきます。映像は正に「百聞は一見にしかず」の通りであり、見る人へのアピール力はかなりなものです。また、家庭用のVTRの普及により、審判員が自分の家で時間のある時に繰り返し見ることができるという利点もあります。当初は米国の審判組織が作成した映像や国内のテレビ局で放映された映像から教育資料として参考になる場面を編集し、クリニックで使用しましたが、現在は「映像委員会」の活動で自らが必要な映像を制作する事もはじめました。映像による教育は様々な利用形態が考えられ、今後も重要な手段となるでしょう。

これらの活動を続けていく中で「記録を残す」ことにも取り組んできました。関東審判部の前身「日本アメリカンフットボール審判協会」が服部慎吾氏、安藤信和氏両氏をはじめとする諸先輩のご尽力で設立されたのが1954（昭和29）年。早くも37年が経過した訳ですが、今後に向けて当部の活動記録を残すのは現在活動している者の責務であると思います。この観点から各年度の活動記録をまとめたのが「ANNUAL REPORT（年次報告）」であり「FOA・EAST・NEWS」です。また、担当理事の努力で「理事会の議事録」も毎回作成され、その抜粋は「FOA・EAST・NEWS」に掲載されています。

以上がこれまでに水田部長の指導で当部の運営を行ってきた私が心がけてきた事です。登録部員の皆さんの努力、協会関係者、チーム関係者の努力でアメリカンフットボールも大きく発展してきました。しかし、今後10年間の発展はこれまでの10年以上の発展となるでしょう。今後に向けて当部の課題を私見としてまとめました。

まず第一に何よりも審判技術の向上です。教育制度が整備されてきたとはいえ、今後も「より正確な」「より早い」ジャッジが求められることでしょう。そしてどのスポーツでもそうですが審判員全員のジャッジが統一され、全員がレベルアップすることが望まれることでしょう。競技の発展、マス・メディアを通した

情報伝達量の増大とともに、プレーヤー、コーチなどチーム関係者、および観客のルールに対する理解が深まることに対して、当然審判員は絶えずその前にいる必要があります。新しい理事会の下で新しい教育体系教育方法が実施されると思いますが、何よりも審判技術の向上には審判員個人の努力と熱意が必要です。与えられたものをただ消化しているだけでは、いい審判員とはなりません。ルールとメカニクに対する自らの学習努力、そして憶えた事に対する適用の研究と訓練がなければ誰でもが安心して任せられる審判員にはならないと思います。教育資料を揃え、それを説明するインストラクタはいい審判員を育てるための環境を提供しているにすぎません。それをどう利用し、吸収するかは各審判個人の自覚と努力だと思います。

次に必要なのがやはり組織の充実です。150人近くの組織となった現在、審判活動の活性化と交流の促進を目的とし、組織担当理事を中心に検討した新ブロック制が敷かれました。各ブロック・リーダーの努力もあり、この新ブロック制を契機にブロック内の活動が活性化した所もあります。各ブロックのリーダーの方は大変だと思いますが、大きくなった組織を絶えず新鮮な、活気のある状態に保つにはブロック活動も重要な要素で、今後様々な創意と工夫でカクブロックの活動も活性化してほしいと思います。同時に新審判員の増加も従来と同様今後の重要な課題でしょう。誰もが審判員として入部した頃は「先輩に勧められて」とか「OB会の命令」で気が進まずに入部してきます。彼らに対していかに関東審判部としての帰属意識を持たせ、審判活動にポジティブな姿勢に向けるかは重要な課題です。また、アメリカンフットボールの更なる拡大・発展に対しての準備も必要でしょう。関東地区の場合、今後大学チームの急激な増加はないと思いますが、社会人、高校におけるチーム数が現在の他の先進スポーツのようになる事は考えられます。優れた審判員は直ちには育ちません。従って審判組織としては絶えず数年先を読み、その準備をしておく必要があります。これにはやはり理事をはじめとした執行部だけが頑張っても限りがあります。各部員が将来自分が楽になるためにも組織の拡大、整備が必要だ、との認識に立ち、努力する事が必要でしょう。

第三に国際化への対応です。ここ十数年前まではアメリカとアメリカ軍の駐留する国で行われてきたフットボールがヨーロッパを中心に急速な勢いで発展してい

る事はご存じの事と思います。また、日本におけるアメリカのチームの試合も毎年恒例化している状況です。国対国の対応は日本アメリカンフットボール協会ははじめ、各関連組織で行うことになるでしょうが、審判としてはオフィシャルとしての対応、交流を行う必要があります。そのためには、海外諸国の事情に通じるとともに、ルール上の相違の認識、メカニクの理解、そして審判員の人的交流が従来以上に必要となるでしょう。

この4月から新しい理事会が発足します。従来の審判部の活動で良かった点は更に発展させ、また至らなかった点は新しい考えの下で改善されるものと思います。新理事会は従来の運営方法にとらわれる事無く、自由に活動してほしいと思います。しかし、重要なのは理事の努力だけでは期待されるこれからの審判部の活動に対し、十分ではありません。部員、一人一人が参画意識を持つことと、審判部活動への積極的な参加が必要です。

最後に、従来の活動に対する部員の方々のご協力に対し、改めてお礼を申し上げますとともに、新理事の新鮮な活動の下で関東審判部が伝統を更に発展させ、成長することを期待します。

(きいれ ひろし氏＝関東審判部総務担当理事)

東西を繋ぐ笛―関西での初シーズン―

籠崎 祐輔

私が審判を始めたのは、関東協会（現関東学生連盟）理事として在任中、水田部長より「審判員が不足しているので協力してほしい」と常任理事会の席上で発言があり、それでは、とお引き受けしたのがきっかけです。審判部にお世話になって10年以上の年月が経過しましたが、未だに技術が未熟でいろいろ毎年勉強させられているところです。平成2年8月、突然関西へ転勤となり、関東審判部の皆様にはご迷惑をお掛けしてしまいました。

9月から関西協会のお世話になっています。秋のシーズンは10ゲーム程試合をこなしました。最初の試合は姫路独協大学グラウンドで、小笠原氏、森氏、私と関東審判部出身者3人が揃い、関東での試合と間違いそうでした。試合終了後、関西審判部の例会に出席の途中、姫路一大阪間の車中でいろいろと関東との違いを勉強させていただきました。

関東地区と比較しますと、まず関西は競技場に大変恵まれています。シーズン中は必ず試合が行われてい

る専用競技場があり、芝生の競技場も多く、それ以外でも砂地のため、ユニフォームの汚れが少なく、洗濯にも支障を来すことはありません。ローカル・グラウンドも少なく、交通の便が良いことも特徴の一つでしょう。また、審判の割り当てが、社会人、大学、高校との間で多少の交流はあるものの、それぞれが独立して運営されています。担当する試合数も関東のそれに比べて少なく、春・秋の日程はそれぞれのシーズン単位で事前に決められます。シーズン中に毎月定例会があることや、シーズン終了後に会費制の親睦会があるのは関東と似ていますが、これらが実に機能的に運営され、部員間のコミュニケーションはよくはかれています。

以上、いろいろ述べましたが、関東、関西と違いはあっても審判員としては皆仲間です。地域の違いを越え、頑張っていきたいと考えています。

(かごさき ゆうすけ＝関西審判協会)

卒業12年目のルーキー

井上 知行

この年になってルーキーと呼ばれるとは思ってもみなかった。慶応大学在学中は慶応高校のコーチとしてまた、卒業後は平成元年まで助監督として技術指導よりはもっぱら選手、コーチのモラル向上に努めた。当時のチームは問題児が多く、相手チームに対する野次に「慶応らしくないネ」と小畑レフリーの声。「くだらない反則はもったいないヨ」「チームエリアはどこまでだっけ？」など、よくいただいたアドバイスであった。

昨年春、大先輩である綿引氏より「ボクも走ってるんだ」と連絡を受け、審判部の総会に出席した。予想以上に（失礼！）しっかり運営されており、驚き、異なった交友関係が広がった事を喜んでおります。

フットボールを媒体に大勢の人々がなにかを求めて集まってくる。高校生は「カッコ良さ」を求めてユニフォームをつけ、社会人は日頃のストレス解消にとダミーにあたる。コーチングシステムの確立によりフォーメーションはより高度になり、選手個人にもハイテクニクを要求される時代である。百余人の部員を有するチームは分業化も進み、チームワークを忘れがちになる。基本的には選手各自の自主性を尊重し、楽しいフットボールを求めてほしい。楽しいフットボールは正しくマナーであり、ルールを守る心であろう。

そんな私も昨年は30試合「楽しいフットボール」を体験できた1年であった。

(いのうえ ともゆき＝関東審判部員)

計報 三樹 雅史君 死去

関東審判部インストラクタ委員・三樹雅史君はかねてから病氣療養中のところ去る3月5日癌のため逝去されました。享年32才。

ここに慎んで哀悼の意を表します。

日本アメリカンフットボール審判協会
関東審判部

三樹雅史君を偲ぶ

伝田 晴久

次のFOA総会にて、三樹君の近況を報告してほしいという要請を受けたのが、納会の日、2月8日のことでした。西高OB会のこともあり、近々お見舞いに行こうと思いつつ、また余り早すぎて「古い近況報告」になるのもどうか、と思いつつ日があたってしまいました。3月5日の夜、群馬県新治での仕事を終え、次の訪問先である金沢への移動中、長岡駅の公衆電話で自宅へ電話したところ、彼の訃報を知らされました。嗚呼、何ということでしょう。こんなことになるなら「少々古い近況」でも・・・直ちに帰りたいたと思いましたが、生憎スケジュールは土曜日まで金沢、大阪でどうしても外せない事で埋まっていました。寒い車中、悶々としながら金沢へ向かいました。

昨年の年賀状には「春には戻りたいと思います。これから体力作りだ！」とありました。その年の11月初旬に見舞ったときには、少々痛みがあると話してくれましたが、外見は元気そうでした。今年の1月21日付けの手紙には「・・・こちらの方は相変わらずです、と言いたいところですが、すっかり寝たきりの状態になってしまって、多少体力の低下を感じています」とありました。

三樹君の訃報に接したとき、私は「嗚呼、惜しい。まったく、惜しい人材を失った」というのが実感です。やがて来るものと覚悟はしていましたが、それにしても早過ぎます。

FOAに参加したのは何時でしたか、1977年西高を卒業し、直ちに慶応へ進学されましたから、たぶん1981年には登録されていたものと思います。もちろん高校を出て直ぐに高校の審判を手伝ってくれたので10年を超える経験は持っていました。彼は

経験もさることながら、大変研究熱心で、ルール、メカニックともに、おそらくFOAの中でも最も精通した一人に属するのではないか、と思います。彼は、ブリゲームミーティングのみならず、ゲーム後のミーティングも積極的でした。仲間は、ルールやメカニックで不安になることがあれば彼に聞けば良い、ルールブックがそっくり頭に入っているのではないかなと思うほどでした。おそらくルールブックは隅から隅まで読んでいたものと思います。彼は理論、知識に精通しているのみならず、実際の動きもしっかりしたものを持っていました。そして大変冷静な判断力と、安定したバランスのよい精神を持っていたように思われます。そのせいと思いますが、大先輩小畑氏はレフリーを務めるとき必ずアンバイアに彼を指名しておられました。皆さんもきっと、大磯クリニックでの名インストラクタぶりを、鮮やかに思い出されていることでしょう。

彼はもう一つ大変な特技(?)を持っていました。「雨男」なのです。何時でしたか、横浜スタジアムでのゲーム、それまでは素晴らしいお天気でしたのに、ゲームが始まる直前から急に雲行きが怪しくなり、ついに大雨になってしまいました。それも雲があるのはスタジアムの上だけで、遠くにはぐりと青空が見えるという有様。さらに驚くべきことに、ゲーム終了とともにサッとあめは上がってしまいました。何と言う事でしょう。それ以来我々はテレビの天気予報よりもアサイメント表を信じるようになったというのは、もちろん嘘ですが・・・

フットボール界(それも特に審判)で優秀な人材が産業界で優秀でない筈がありません。大学院(工学)卒業後、東洋エンジニアリング(TEC)に入社し、何度も海外に出張されていたようです。中国の発電所の話をよくしておられました。私は今、ロジスティクスという領域を研究しているものですが、以前中国の発電所の話の際、その関連で彼にロジスティクスの話をし、何時かゆつくり話をしようと約束したのを憶えています。昨年ロジスティクスの件で米国へ出張したとき、TECの若い技術者と一緒になりましたので彼の事を尋ねましたら、何と入社同期生ということでした。そのとき、浅からぬ因縁を感じました。この若い技術者の方も大変優秀な方でしたが、かれもその方に勝り、囑望されていたに違いありません。

思い出は尽きません。それにしても、若過ぎます。残されたご家族のことを思うと胸が詰まります。彼もさぞ無念な気持ちであったことでしょう。ご遺族の方々に、衷心よりお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈りしたいと思います。

(でんだ はるひさ=関東審判部員)

『三樹雅史君を偲んで』

山口 淳一

私と三樹君とはFOA仲間というより都立西高校のフットボールの同窓生という関係のほうが強いと思います。彼を偲んで昔話をさせてもらいます。

私が初めて彼と出会ったのは、今から17年前の昭和49年の夏でした。この年の西高フットボール部の合宿は東京大学の検見川寮で行われました。私は大学浪人生で彼は高校1年生でした。皆さんはヒゲ面の彼が記憶にあると思いますが、さすがに当時はヒゲもなく、かわいい顔をしていました。身長は170センチに届かず、体重は75キロぐらいの「こでぶ」でした。

当時、西高のヘッドコーチは以前FOAにもいらした加藤さんでした。加藤さんは練習では気が遠くなるほど走らせた方で、1回の練習で10000ヤードのダッシュが目安でした。そのために彼のような太った選手にはとても辛い練習だったと思います。いつもみんなのお尻の方からついていて、今にも泣き出しそうな顔をしていた記憶があります。しかしながらブロックの練習になりますと、今までとは打って変わったように元気になり、先輩だろうが、OBだろうがお構いなしに闘志を剥出しにしてぶつかって来るような選手でした。当時の私たちOB連の会話では身体は小さくて足は遅いが、ガッツがあるからきつとよい選手なるだろうという評判でした。

翌昭和50年の4月から私も西高のフットボール部のコーチングスタッフとなり、毎日のようにグラウンドに行き、彼と一緒に練習をするようになりました。彼は本当によく練習をしました。2年生の時にはライの中核になってキャプテンを務めていました。しかし相変わらず足は遅いまま、声だけが一倍大きく、みんなを引っ張って行くタイプの選手でした。私の記憶では、彼が練習を休んだことはなかったと思います。彼はどんな練習にもめげず、元気いっぱいのラインマンでした。そんなかれも一度だけ弱音を吐いたことがありました。この話をすると彼はいつも嫌そうな顔をしていたのが思い出されます。それは「鉄棒」でした。その頃はウエイトトレーニングの器材が部費では買えませんでしたので、もっぱら腕立て伏せとか、鉄棒を利用したトレーニングばかりでした。その練習の中で懸垂の状態で30秒ほどぶら下がっているというものがありました。彼は先にも言いましたように「こでぶ」でしたのですぐ落ちてしまうのでした。この時ばかりはさすがのかれもいじけていました。それが、彼が私に見せた唯一の弱みだったと思います。彼がコーチになった時に、まず私に提案したのがウエイトトレーニング器材の確保でした。よほど「鉄棒」が嫌だったのでしょうか。

その後ポジションがタックルだったのをセンターにコンバートした時も、一つも文句を言わずに練習が終わった後に黙々とスナップ練習をしていました。ロングスナップは毎日200本くらいしていたのではないのでしょうか。しかし、西高はコーチが悪かったせいで負けてばかりいました。彼は酒を飲むといつも「山口さんには悪いことをしました。一度もコーチとしていい思いをさせてあげられなかった」と、言っていました。これも責任感が強いばかりに気掛かりだったことなのでしょう。彼はフットボールばかりでなく、学校

生活においてもリーダー的存在でした。体育祭や記念祭などにおいても活躍していました。もちろん勉強もよくしており、ストレートで慶応大学工学部に入学しました。大学においても3年くらいまでフットボールの勧誘を受けていました。しかしながら、大学ではプレーをやらずに西高のコーチングスタッフとなり、毎日後輩の面倒を見てくれました。そのかいがあつて、コーチ2年目の秋の都大会で西高は優勝できました。彼の努力と選手を引っ張っていく力の成果だと思っています。

そして、大学在学中よりFOAに入り審判をしておりました。今考えると不思議なのですが、彼は大学生にも関わらずFOAのメンバーでした。大学卒業後は修士課程に進み、東洋エンジニアリングに就職して、発電所のタービン関係の仕事をしていました。入社の面接の時も、私たちにヒゲを剃っていけと言われたにも関わらず、あのままで面接を受けに行きました。とても頑固な男でもありました。

このように、彼のことを振り返って見ますと彼は何事に対しても真剣に取り組んできたと思います。こんなにいい男が何故、こんなに若くしてこの世を去らねばならないかと思うと、とても悔しくなりません。彼は人一倍人のために尽くしてきたし、悪いことをしたといえば、高校時代に私と酒を飲んだくらいです。とてもやりきれない気がしてなりません。

彼は、ガンに罹ったと知ったときに私に「僕はまだ死ぬわけには行かないんです。まだまだやり残している事は山ほどあるし、子供も小さくて二人いるし、女房一人では大変なんです。絶対にガンに勝ってみせますから」と言っていました。そして彼は1年7ヵ月ガンと戦ってきたのです。この若さなら普通の場合だと3ヵ月くらいしか保たないそうです。彼はガンセンターでも手術は無理と言われてから食事療法を行い、ガンに栄養を与えないよう頑張ってきました。実際に肺ガンの方は徐々に小さくなっていったのですが、今度は骨の方に転移してしまい、「温熱療法」を続けていましたが、効果が出ずに少しずつ体力を失っていき、とうとうガンに屈してしまいました。死の直前まで彼は「ガンで死ぬなんて馬鹿みたいだ。いい検査があるから定期的に受けていれば、絶対にガンで死ぬことはないのですから。山口さんも酒ばかり飲んでないで検診を受けなさいよ。ガンで苦労するのは僕だけでたくさんですよ」と言っていました。そんな奴なんです。どんなに苦しくても皆を力付けて引っ張っていく奴なんです。本当に、まだ三樹が死んだなんて信じられません。彼の方がずっと年下なのに、僕は随分説教されました。社会のこと、仕事のこと、愛についてのことフットボールのこと……。思い出す度に彼とまた一緒に審判をやつて、酒を飲んで話をしたいと思います。皆さん、三樹のために本当にありがとうございます。まだまだ言い尽せませんが、少しは彼という男がわかっていただけたでしょうか。私たちが審判をするときにはいつも三樹が見てくれていると思っています。(やまぐち じゅんいち=関東審判部)

FOA・EAST・NEWS No.10

日本アメリカフットボール協議会 財政部・編集 誌:1991年3月31日

発行責任者:喜入 博

編集担当:森 賢

※ 無断転載、引用を禁止します